

News Letter

フクロウ

梟のいる森林



フクロウ（写真提供・長沢淳）

夜あるいは黄昏時または明け方、雑木林から不気味な声が聞こえてくることがある。その声はちょうど猫の声をやや甲高くした様なもの悲しい声である。幼い頃その声が聞こえてくると怖くなり雑木林の横を駆け抜けた記憶が今でも残っている。子供心ながら、夜の不気味な声というぬえと鶺鴒（トラツグミ）だと思い込んでいたことがあり、その思いは本当のトラツグミの声を聞くまで続いた。結局声の主の正体を知ったのは3年程前であった。それはフクロウの幼鳥であった。

4年前、自宅近くの雑木林に通い続けたことがあった。およそ20ha程の小さな雑木林の鳥類相に興味を持ったためであった。周辺部は西側にゴルフ場、北側、東側を農村集落や新興住宅地に囲まれ、すぐ南側を名神高速道路が走る。内部はアカマツやコナラ等の樹林のほか、草地、池沼があり環境的にはバラエティに富ん

でいた。しかし、不法に投棄されたゴミの山があり、時にはオフロードバイクで走り回る若者もいるためか到る所で地肌剥き出しになり、さらには毎年8月になると花火大会が開かれる、おおよそ鳥類にとって好ましい環境とは考えにくい状態であった。

しかしそんな所にもフクロウが住んでいた。最初の出会いは4年前の冬、早朝のバードウォッチングの時だった。明け方、まだ薄暗いアカマツやコナラなどの雑木林の中、突如大きな白い塊が音もたえず飛来し目の前に止まった。フクロウだった。それまでフクロウというものを見たことがなかった私にとって、その時の感動を表現する言葉は、今でも見つからない。真っ黒な瞳と重厚な、そして威厳のある雰囲気、私は人間相手にさえしたことのなかった一目惚れをフクロウにしてしまっていた。

フクロウに再び会いたいという思いと、自宅近くの、それもフクロウが住める雑木林の鳥類相とその季節変化に興味を持った事、ちょうど卒論時期だった事が重なって、ほとんどの週末をその雑木林でテントを張って過ごすことになった。結局、約一年間そういう生活をして、フクロウと出会えたのはその後3回、独特の「ゴロスケホッホ」というさえず囀りは数回聞いただけだった。しかし、フクロウが意外と人里に近い小さな雑木林でも住んでいるという事実は私を驚かせた。さらに、正体のわからなかった猫の声をやや甲高くした様なもの悲しい声、フクロウの幼鳥の声だと知った時、人里の近くの小さな雑木林でもフクロウが子育てをしていたことに大きな驚きを感じてしまった。

その雑木林は今でも広さは変わっていないが、以前程フクロウの声は聞こえなくなってしまう。雑木林も手入れがされなくなり、倒木は放置され、ツツジの類やササのブッシュがかなり増え、不法に投棄されるゴミがさらに増え、小さいものだがヘリポートが建設されてしまうなど見る影もなくなってしまう。自宅付近でも次々と住宅地が増え、4年前とは比べ物にならない程、雑木林や畑地も減ってしまった。しかし今でも夜間や明け方に、わずかに残った雑木林から時折フクロウの囀りや幼鳥の声が聞こえてくることある。格段に減ってしまった雑木林に取り残されたように住み着くフクロウ。なまじ夜間に活動するため、人の目につきにくいフクロウ。いずれ誰にも知られぬまま人里近くから姿を消して行く運命なのだろうか...

（大阪支社自然環境調査室・黒坂健夫）